

① ～郷土の歴史はおもしろい～

新発田藩士・久米幸太郎と三輔親子

…40年後に祝田浜(石巻市)で討つ、
史上第2位、最長記録は53年…

東蒲原郡郷土史研究会「阿賀路の会」
副会長 齋藤 正美

② 【主な登場人物の紹介】

- ・久米弥五兵衛 久米家6代目当主、家禄150石 休右衛門に殺害
- ・久米幸太郎 弥五兵衛の長男、本懐を遂げて家禄250石
- ・久米盛次郎 弥五兵衛の次男、本懐を遂げ5人扶持15石
- ・板倉留六郎 弥五兵衛の弟、幸太郎の叔父、4人扶持12石
- ・久米三輔 幸太郎の長男、医師、後藤新平と同期生
- ・滝沢休右衛門 弥五兵衛を殺害、僧侶となり黙昭と称す
- ・後藤新平 医師・官僚・政治家、東京市長、鉄道院総裁
福島県須賀川医学講習所卒

③ 【仇討ちのあらすじ】

(1) 文化14年(1817)12月20日、城下竹町の中西六右衛門宅で、将棋大会が開催され、その後の酒席で久米弥五兵衛が滝沢休右衛門に殺害された。

(2) 残された家族は、妻、長女・幸、長男・幸太郎(7歳)、次男・盛次郎(5歳)の4人。これまでの家禄150石と家屋敷は、新発田藩に取りあげられ、御合力米として年30俵を支給された。家族は妻の実家である南部治左衛門の家に身を寄せた。まだ幼い幸太郎兄弟は、ここで育てられ、学問に武芸に励むようになった。この時から、久米兄弟は武士の子として父の仇を討つことが運命づけられ、「不^ふ俱^ぐ戴^{たい}天^{てん}の敵」を追い求める定となった。



④ (3) 文政 11 年(1828)5 月 15 日、幸太郎 18 歳、盛次郎 15 歳となり、新発田藩主より仇討ちの許可を受ける。翌 16 日、兄弟に叔父板倉留六郎が加勢し、三人は果てしない仇打ちの旅に出発した。一行は、新発田藩が幕府の奉行所に仇討ちを届け出て、受け取った幕府の許可状を携えた。

(4) 最初に三人は、村上を経て庄内地方から東北各地を巡り、江戸へ向かう。

その後の足跡は、京都、大阪及び中国、四国、九州地方まで及び、足跡がないのは蝦夷地だけとなったという。この間、資金確保のために江戸で医術を学び漢方医を業とし、京都でも開業した。敵探索の効果を高めるため、途中から三人は別々に分かれた。

⑤ (5) 探索を始めて 29 年後の、安政 4 年(1857)初夏に、偶然の機会から休右衛門に似た人が仙台領石巻近郊のお寺に、僧侶となって秘かに住んでいることを新発田藩に教えてくれる人がいた。その時、信州にいる幸太郎の元に、新発田から 2 通の手紙が早飛脚で届けられた。1 通は母から、1 通は新発田藩からであった。知らせを聞きつけて幸太郎が、飛ぶように新発田に戻ったのは、同年 7 月 9 日であった。

久しぶりに新発田に戻った幸太郎は、母や姉に会うがゆっくり話すときもなく、すぐに仙台領石巻近郊に駆け付けた。しかし休右衛門の面体を知らない幸太郎は、本人である確認が得られず、面識の人に確認してもらう必要があることから、一旦新発田に戻った。



⑥ (6) 新発田藩は、急遽面識のある藩士 2 名を仙台領石巻近郊に派遣、その僧侶の黙昭が休右衛門であることを確認した。幸太郎は安政 4 年(1817)10 月 9 日、仙台領石巻近郊の祝田浜で、父弥五兵衛を殺害した宿敵・滝沢休右衛門(黙昭)を討ち取った。父が殺害されてから 40 年、仇討の旅に出発してから、29 年後の事であった。この時、幸太郎 47 歳、盛次郎 44 歳、黙昭・休右衛門は 82 歳になっていた。

(7) 新発田藩は検視や仙台藩への挨拶のため、宮北勇五郎以下 37 人を現地へ派遣した。11 月 26 日に仙台を出発、会津街道・津川を経て 12 月 10 日に新発田城下へ到着した。

⑦ 津川到着は、途中の本宮方面が悪路のため一日遅延の 12 月 6 日となり、翌 7 日(新暦 1 月 27 日)に綱木宿に向けて旅立った。しかし諏訪峠(516 尺)付近が吹雪のため、行地宿で急遽宿泊した。翌 8 日に同宿を出発して綱木宿に一日遅れで到着した。翌 9 日に同宿を出発し五十公野宿に到着、予定より 2 日遅れて翌 10 日に新発田城下へと出発した。

阿賀町綱木・二瓶亮三郎文書「元治 2 年(1865)10 月『乍恐以書附奉願上候』」に「一新発田様浪人追討(途中略)嚴重之御通行一」との古文書が残されている。新発田藩士 37 人、幸太郎ら 3 人、人足 20 人、駄馬 4 匹を連れての一行が、急遽宿泊することになった行地宿、宿泊をドタキャンされた綱木宿は、上を下への大騒ぎであったであろう。

⑧ (8) 新発田城下に到着した幸太郎は、藩主に御見通りを許され、元の 150 石に 100 石加増され、家禄が 250 石となる。後に幸太郎は三左衛門と改名、町奉行の地位に昇進した。戊辰戦争では、高齢を押して活躍した。

(9) 明治 4 年 7 月、新発田藩は新発田県となり、同年 11 月に新発田藩は廃止され、新潟県となる。家禄奉還により、家禄の一時金と家屋敷(竹町)を売り払った資金をもとに、東蒲原郡日出谷村に移住し、旅館「久米屋」を開業した。養豚業や漆細工職をやってみたものの、武士の商法で失敗した。

再度、諸国漫遊の旅に出たという。明治 23 年、病に罹り日出谷に戻り翌年 2 月 5 日、同地で死去し 8 日に新発田市諏訪町・三光寺に埋葬された。

⑨ 【医者となった幸太郎の長男・三輔と後藤新平】

(1) 幸太郎は新発田に戻り、47 歳を超えて結婚。妻・まつを娶り一男三女を授かる。(明治 24 年 9 月現在)

- ・長女 福島市人の伊関某に嫁ぐ。
- ・次女 陸軍歩兵大尉・奥田正忠に嫁ぐ。
- ・三女 未だ嫁かず。
- ・長男三輔 医者

(2) 妻・まつ没し、後妻にマサを娶り二男を授かる。(明治 24 年 9 月現在)

- ・長男 良介
- ・次男 六蔵 早死

⑩ (3) 三輔は医者道へ進む。久米家三代目の三男が、新発田藩主の御医師に召されていることや、父・幸太郎自身が江戸や京都で漢方医を開業していたことが、三輔が医者を目指すことに影響したのかもしれない。

いずれにしろ三輔は福島県須賀川医学所に学び、同期生に後藤新平がいたという。その後、彼は父・幸太郎が住む日出谷村ではなく、人口が多く医者が集まっていた津川町に開業した。

たまたまある冬の夜、日出谷に来診の折り、行き倒れにあった病人を蘇生させたことがきっかけとなって、村人より村医を懇請されて、日出谷に開業することになったという。

三輔は、多くの村人から名医として信頼され慕われた。

⑪ (4) 大正3年11月1日、磐越西線は全線開通した。日出谷駅近くの平瀬トンネルは湧水に悩まされた難工事だったが、一人の犠牲者も出さなかった。

これは、当時としては他に例を見ない快挙であった。此の喜びを何とか後世に伝えたい、と村では協議した。偶々、できたばかりの日出谷駅前に、医師三輔が開業した。三輔は鉄道院総裁であった後藤新平と医学校で同期生であった。このツテで三輔が新平に揮毫を依頼、新平もまた、山深い支線のトンネルで犠牲者が出なかったことに感銘、快く筆をとった。

問題

ところが送られてきた書に村では喧喧囂囂^{けんけんごうごう}。というのも紙一枚に一字ずつ書かれていたため、どう組合せるものか確信がなかったからだ。とうとう書の大家である隣村の両鹿瀬村長に頼み込み、初めてわかったという。

⑫ 【墓石を阿賀町当麻(日出谷)墓所から先祖が眠る三光寺へ】

(1) 久米家代々の墓所は、新発田市諏訪町の浄土宗・三光寺である。幸太郎の先妻・まつ(慶応2年没)までの墓石と明治維新以降に建立の墓石とは、明らかに石材が異なる。これは維新後に新発田を離れ、当麻(日出谷)へ移り住んだことと関係がある。

明治24年に当麻(日出谷)で没した久米幸太郎(7代目)は、3日後に新発田市諏訪町の三光寺に葬られた。明治33年に没した、幸太郎の後妻であり三輔の継母・マサは、当時住んでいた当麻(日出谷)の旧墓所に葬られた。以後、三輔の乳母(明治36年)、久米三輔・醫王院博愛平等清居士(大正4年没)、三輔妻・タカネ(昭和2年)も同所に葬られた。

(2) 昭和60年9月、子孫(10代目)の方により、久米三輔(8代目)の墓石を当麻(日出谷)旧墓所から新発田市の三光寺へ改葬した。その際、当麻の新墓所に、日出谷に住んでいた証として「久米三輔供養碑」を建立した。

その後、当麻(日出谷)の住民からの通報で、三輔の継母・マサ、三輔妻・タカネの墓石が当麻(日出谷)の旧墓所に残されていることを知り、平成3年10月2日、子孫の方たち等の立会いの下、護徳寺・石川禮哉住職(当時)による読経を済ませ、三光寺へ改葬した。

墓石移転により、久米家一族は127年の時を超えて、今は互いに寄り添うように、新発田

城下で眠っているのである。

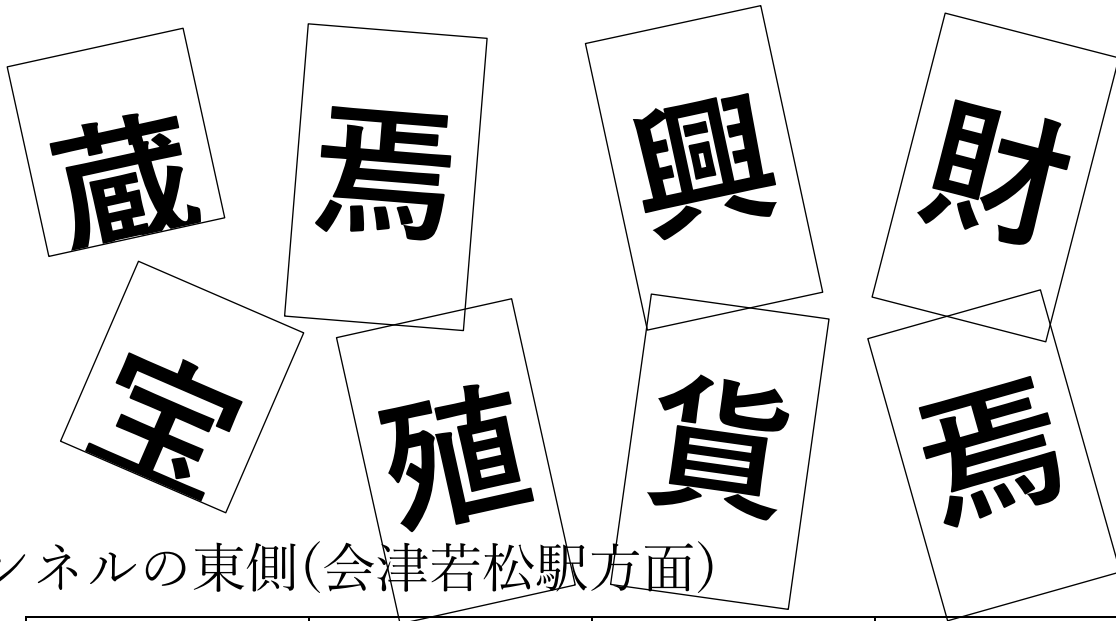


久米三輔・醫王院博愛平等清居士

久米幸太郎の墓

【 問 題 】

久米三輔が後藤新平に依頼した揮毫を以下の8枚の書を組み合わせ合わせて完成してください。



トンネルの東側(会津若松駅方面)

--	--	--	--

トンネルの西側(新津駅方面)

--	--	--	--

ヒント：上の1文字目は^{ほう}宝、下の1文字目は^か貨、4文字目はどちらも^{えん}焉(これに)

【回 答】

久米三輔が後藤新平に依頼した揮毫

トンネルの東側(会津若松駅方面)

宝	蔵	興	焉
---	---	---	---

トンネルの西側(新津駅方面)

貨	財	殖	焉
---	---	---	---